と云、其外異草多し、藥品は黄蓮、人參、チク中にも柴胡（サイコ）は絶品なり、一年糠尾村の醫生宮原某、採藥に登りて見出し、採歸りて試るに、功能他に勝れり、因之京都の物産家に鑒定を請に、海内第一品と賞す、往古より柴胡は漢渡なし、銀州の產を銀柴胡とて、最上とすといへども、得る事易からざる故にや、舶來の物なし、和產にも二種あり、沙柴胡（かはら）は大に別なり、

淺間嶽

〔書言字考節用集（二乾坤）〕淺間嶽（アサマタケ）信州小縣郡

〔和漢三才圖會（六十八）信濃〕淺間嶽　在當國之艮、頂上常燒烟起、

〔倭訓栞（中編一）阿〕あさま　口語にいふは淺間の義、あさばともいへり、〇（略）中世に其名を專らにするは、信濃佐久郡也、天武紀に、灰零于信濃國と見ゆ、此嶽高峻といへども、驛路其肩をめぐり、路ゆき人も遠大を去らず、淺間にありて、深邃を見ざるよりの名にや、絕頂に大坑あり、徑十町ばかり、常に煙立のぼりて、硫黄の氣あり、大燒の時は、五七里が間鳴動し、茶碗皿鉢の類も、響きて破る、事ありといへり、

〔木曾路名所圖會（四）〕淺間が嶽は、極て高しといへども、此邊の麓の地高きゆへ、甚高くは見え侍らず、峯に常に煙たつ事、甑のいきの上るが如く、又雲のごとし、朝より午時頃までは立ず、大略夕がたに煙たつ、この山は半より上に草木生せず、一日の中去ばし煙なき時あり、大燒する時は、五里七里の間夥しく鳴動す、皿茶碗の類ひもひゞき破る、事あり、燒石も飛ぶ也、此燒石道のかたはらに多くあり、常の石よりは輕し、色は灰色にして少し黑く、耕作の妨なるゆへ、所々に集て積上たり、大燒はまれなり、小燒は時々あり、江戸のあたりへも、此山大燒の折ふしは、灰の飛來る事有といふ、此山は江戸の方へ近く、美濃尾張の方へは遠し、伊勢物語に、業平の道行の次第、伊勢尾張の邊よりあさまがたけを見て、歌をよみたる樣に書れしかども、伊勢尾張の方よりは道のほど遠く、山隔りて見えず、駒が嶽は能見ゆる、業平の武藏上野のほとりにて、淺間が嶽をよめる歌を、